

◆江戸時代の脇往還◆

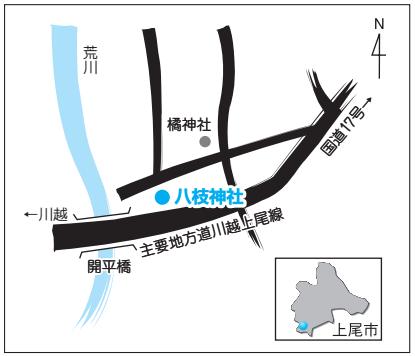
古文書にみる宿場と村の生活 ④

江戸時代の「五街道」(東海道、中山道、日光道中、奥州道中、甲州道中)とその付属道は、現在の一級国道ともいふべき主要道路であるが、当時幕府では道中奉行が管轄していた。五街道以外の道路は全て「脇往還」と分類され、これは勘定奉行の管轄となっている。江戸時代の上尾市域の道路では、中山道は五街道の一つであるが、他の道路は全て「脇往還」ということになる(『上尾市史第六巻通史編(上)』)。

江戸時代の上尾市域で、脇往還が集中している所に原市町がある。幕末期の文政五(一八二二)年ごろの記録には、次のように記されている。「上新町ハ北ノ端ニテ、夫ヨリ次第シテ南ニ続ケリ、此往還南ノ方ハ大門町ニ達シ、北ハ菖蒲町ニ続ケリ、又上新町ノ内、西側ニ岐路アリ、上尾・桶川等ニ至ル、又下町ヨリ東西ヘ達スル道アリ、東ハ幸手・岩槻ヘ通ジ、西ハ大宮宿・与野町ヘ続ク、全ク脇往還ナレド、カ、ル宿駅ヘ通フ地ナレバ、本道ニモコトナラズトイヘリ」。この記述によると、原市町を通る道は脇往還ではあるが、多くの宿駅や在郷町と結び付いており、大変な賑わいをみせていたこととなる。これは、原市町が「市場町」としての機能を持つだけでなく、脇往還の要衝の地であり、宿継ぎの役割も持っていたことを示している(『新編武蔵風土記稿』)。



平方の川越道と八枝神社。写真右奥の道は荒川岸へと続く



江戸時代の平方村は、脇往還の視点からみると大変特徴のある地域である。脇往還としては、上尾宿と川越城下を結ぶ「川越道」が通っているが、荒川に面した平方村には「河岸」がある。この河岸場が脇往還と強く結び付いており、平方村の脇往還の特徴になっている。幕末期の記録に「当村ハ埼玉郡ノ諸村、及ビ上尾宿辺ノ村々ヨリ、入間郡川越ヲヘテ、多磨郡ノ方ヘ馬

継ノ所ニテ、上尾宿へ一里十四町、桶川宿へ二里、川越町へモ二里ノ人馬ヲ継送レリ」とある。この記述を見ると、平方村は遠隔地への「馬継場」と記されているが、これは河岸場と脇往還が結び付いた結果を示していることになる。河岸場があったため、人や荷物の動きが活発であったということが、この脇往還の特徴である(『前掲書』)。

中山道の久保村地先から井戸木村を北西に進む道は、比企郡松山への脇往還である。上尾市域にはこのような脇往還がまだ数多くあるが、五街道の中山道を補完する役割を果たし、また中山道と強く結び付いている点がある。一つの特徴ということになる(『前掲書』)。

(元埼玉県立博物館長・黒須茂)



○に入る文字や数字を当ててください。

○○○○推進会議委員を募集します。

(ヒントは4ページ)

【賞品】 正解者の中から抽選で5人に、粗品を差し上げます。

【応募方法】 はがきかメールにクイズの答え、住所、氏名、年齢、電話番号、『広報あげお』の感想を記入して、7月20日(金)まで(必着)に上尾市広報課「わくわくクイズ係」へ。

あて先: 〒362-8501本町3-1-1
メールアドレス: s55000@city.ageo.lg.jp

【発表】 賞品の発送をもって発表に代えさせていただきます。 ※正解は8月号のこのコーナーで。前号の答えは「環境」でした。ご応募ありがとうございました(応募者48人)。

市の人口・世帯

(平成24年6月1日現在)

22万7,410人

男/11万3,480人

女/11万3,930人

※前月より102人増。

9万3,705世帯

◆『広報あげお』は、各支所・出張所、JR上尾駅・北上尾駅の他、市内の各公共施設、金融機関などに置いてあり、自由に持ち帰れます。
◆環境保全のため、市内の公共施設へのお出掛けは市内循環バス“ぐるっとくん”を利用してください。